



大淀開発 (都城市)

新社長 堀之内秀一郎氏



ほりのうち・しゅういちろう
都城市出身。2005年入社。企画室
長、常務を経て19年から専務を務
めた。地域貢献と趣味のスポーツ
観戦が高じプロ野球独立リーグの
宮崎サンシャインズを誕生させ
た。同志社大法学部卒。50歳。

総合建設業の県内大手、大淀開発(都城市)の社長が21年ぶりに交代した。就任した堀之内秀一郎社長に抱負や展望を聞いた。(聞き手・経済部編集委員 湯田光)

■抱負を

「入社立時は官製談合事件で業界に逆風が吹き、以後も口蹄疫発生や東日本大震災など受難があった。堅実に会社を成長させた先人や地域、お客さまのおかげで来月65周年を迎える。感謝を忘れず使命感を持ち、時代の変化を前向きに受け止め事業展開する」

「スローガンは強く、優しく、そして泥臭く。工事の種類や大小に関係なく誠実に仕事と向き合う。地域と人に寄り添いながら共に幸福を追求し、建設業界や地域の新時代を切り開きたい」

地域貢献視点で多角化

■「自社や業界の課題は。『一番は人手不足だが、時代の変化で女性もしつかり働ける場になっている。トイレ整備や残業をなくするなど快適に働けるよう努め定着を図っている。外国人(モンゴル人)採用では都城高専と連携を深めている。性別や国籍を問わず柔軟に受け入れ、環境を整える中で共に成長していきたい」

■多角化に積極的だ。

「建設資材の高騰で価格転嫁に苦慮している。生コンなどを自社で内製化している分強みはあるものの我慢のしどころ。6月に義務化された熱中症対策では、熱中症アラームのバンドを着けさせ空調服を配備するなど気を配っている。現場で働く人々を尊敬し誇りに思い感謝している。働きやすく能力を発揮できる環境づくりが自分の務め。業界に光が当たり就職を希望する若者が1人でも増える努力をしたい。デジタルトランスフォーメーション(DX)、情報通信技術(ICT)化にも積極的に取り組んでいる」

■展望は。

「売上高が100億円を達成した際、地域から認められた実感が得られた。今後も常と、都城志布志道路開通や県陸上競技場完成により大型工事は一服した感があり今後は真価が問われる。県外にも進出したい」

(都城市・大淀開発)